

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

教養文化研究室

更科功教授

『土と生命の 46 億年史 : 土と進化の謎に迫る (ブルーバックス ; B-2278)』

藤井一至 著, 講談社, 2024



本書は「土」の本である。一見、地味な本に思えるが、実際に読んでみても地味な本である。しかし、地味だけれど、つまらない本ではない。人類の食料の 95 パーセント以上を生み出している土は、とても興味深い物質なのだ。著者は京都大学で学位を取り、研究所に勤めている科学者だが、世界中の土をスコップで掘り返して喜んでいる姿には、きっと誰もが微笑んでしまうだろう。そして、土を説明するときには、身近な例を挙げて、わかりやすく説明してくれる。太古の海に似た環境として水田を挙げ、植物が上陸した何億年も前の岩石砂漠については、舗装道路を使って説明する。いつもスコップ片手に下を向いて (!) 生きてきた著者ならではのユニークな視点だ。非常識な視点から世界を眺めてみたい人にお薦めできる本である。

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

教養文化研究室

更科功教授

『鯉姫婚姻譚』

(新潮文庫 ; ら -2-1)』

藍銅ツバメ 著, 新潮社, 2025



副主人公の女性は「恋姫」ではなく「鯉姫」である。人間と魚の合いの子、つまり人魚だ。そして主人公は、弟に店を譲って、若くして隠居生活をしている青年だ。青年が父から譲り受けた屋敷には池があり、そこには一匹の人魚が棲んでいた。人間でいえば小学校の高学年ぐらいに見える、その人魚に懷かれて、青年は「夫婦になってあげる」と言われる。しかし、いくらなんでも人魚と夫婦になるわけにはいかない。そこで、結婚を諦めさせるために、人間と人間でない者が結婚して、あるいは結婚しようとして、不幸になった話をいくつも人魚に聞かせる。しかし、それでも人魚は結婚を諦めず、青年と人魚は不幸な結末に向かって転げ落ちていく。しかし、その不幸は幸福でもあった。見方を変えただけで、不幸と幸福がころころと入れ替わる、ちょっと不気味な小説である。